

奥日光の外来植物

— 本来の植物を守るために —



かつて小田代原に群生していた頃のオオハンゴンソウ（昭和46年8月 写真：吉原博司）

■ 外来植物とは？

国外または国内の他の地域から持ち込まれた植物です。現在の日本では、人が生活している市街地や道ばた、河原などでは、ほとんどの草が外来植物となってしまっている場所も多く見られます。このうち、草原や湿原、森林の中にどんどん入り込んでゆき、もともとの生態系を変えてしまうような植物が特に問題になります。こうした種は「侵略的な外来種」と呼ばれ、国外から持ち込まれたものの中に多く見られます。

環境省日光自然環境事務所

奥日光で注意すべき外来植物 (1) オオハンゴンソウ (大反魂草) <きく科>

・基本情報

北アメリカ原産の多年草外来植物で、冷涼で日当たりのよいところを好み、湿原など水分の多い場所にも耐えられます。高さ0.5～2mで、奥日光では8～9月に黄色の大輪の花をつけます。群生して他の在来の植物に影響を与えるため、利尻島、箱根など各地で除去活動が行われています。2006年には外来生物法による特定外来生物に指定されました。

・奥日光でのリスク

かつては戦場ヶ原や小田代原の内部にも多く生育していましたが、長年の除去活動によって、これらの場所ではあまり見られなくなりました。現在ではスキー場や道路端、林内などに大きな群落を作っています。湿原や草原にも侵入する可能性があり、注意が必要です。

・除去の方法

1回除去しただけでは無くならず、かえって種から発芽した株が増える場合もあるので長期間除去を続ける必要があります。地下茎によって増えるので、根や地下茎を残さないようにフォークなどを使って掘り取るのが確実です。年2～3回の刈り取りを続けると次第に草丈が小さくなりますので、広い面積で抜き取りが難しい場合は何度も刈り取りを行ってみるのも1つの方法です。また、特定の農薬の塗布が効果的との研究もあります。



オオハンゴンソウ



草丈の小さな株



除去活動のようす

奥日光で注意すべき外来植物 (2) ハルザキヤマガラシ (春咲山芥子) <あぶらな科>

・基本情報

ヨーロッパ原産の多年草外来植物で、近年中部日本以北に急増してきています。草地や川、用水路の近くにまとまって生えます。高さ30～80cmで4～6月頃、谷間や白根山など山岳地にも生える在来種のヤマガラシに似た黄色の花をつけます。霧ヶ峰や鹿沢など各地でも除去活動が行われています。

・奥日光でのリスク

かなり前からいろは坂の盛土部分などに見られましたが、竜頭の滝付近や金精道路周辺、光徳から逆川でも見られるようになりました。ハルザキヤマガラシは川沿いに広がると考えられているので、今後逆川の下流にあたる戦場ヶ原湿原に侵入する可能性があり、注意が必要です。

・除去の方法

種子と根茎により繁殖するので、4～6月の開花期、結実前に根が残らないように抜き取るのが良いとされていますが、まだ除去方法の研究は少ない状況です。特に戦場ヶ原の上流部では、湿原に侵入する前に早めに除去する必要があります。



ハルザキヤマガラシ

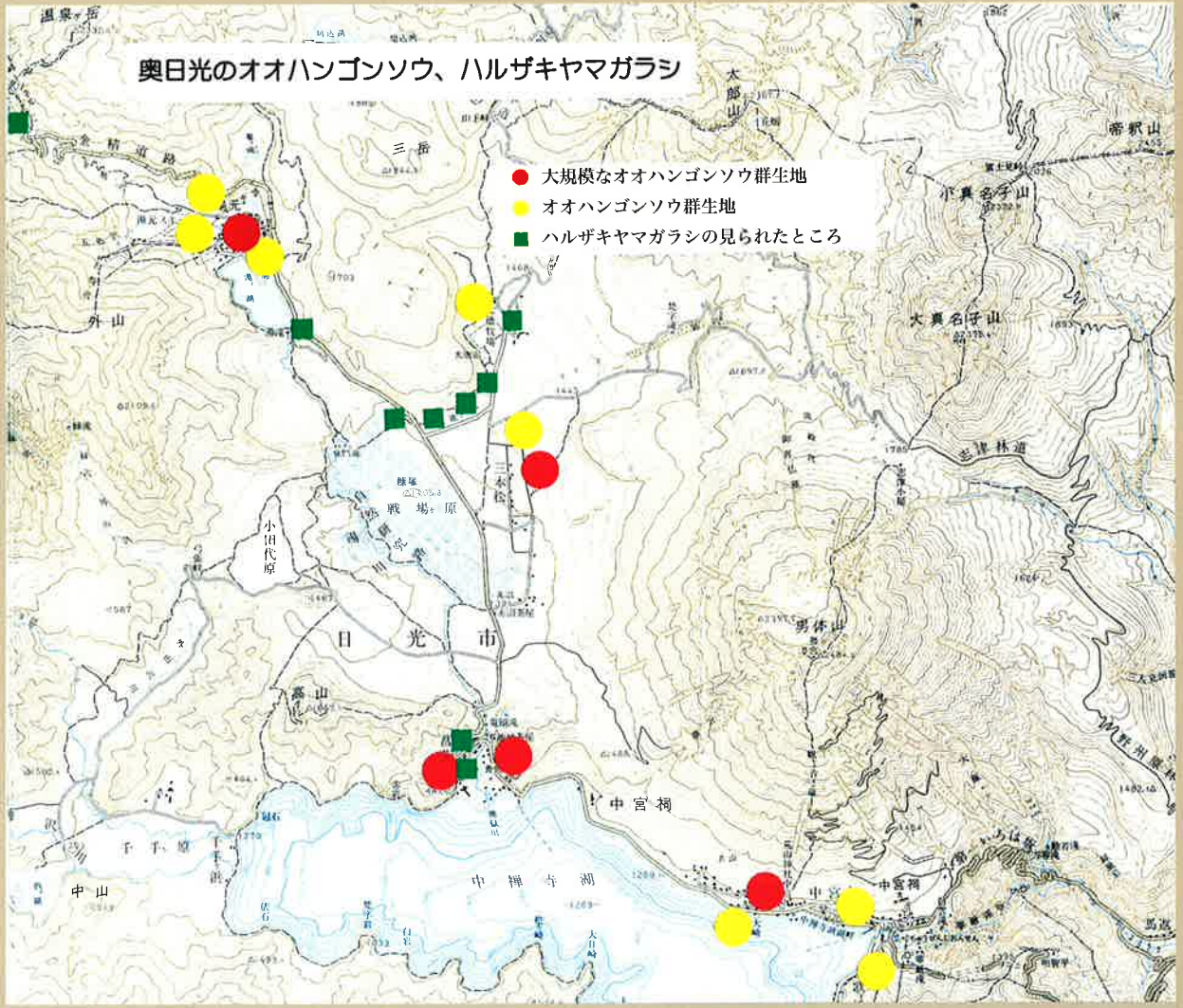


草丈の小さな株



除去活動のようす

奥日光のオオハンゴンソウ、ハルザキヤマガラシ



- 大規模なオオハンゴンソウ群生地
- オオハンゴンソウ群生地
- ハルザキヤマガラシの見られたところ

■このほかの奥日光の
主な外来植物

メマツヨイグサ (あかばな科)

(オオマツヨイグサより花が小さい)



ピロードモウズイカ
(ごまのはぐさ科)

(ピロードのような毛をまとう)



ヒメジョオン (きく科)

(8~9月まで花が咲くものもある)



セイヨウノコギリソウ (きく科)

(在来のノコギリソウより花が小さい)



フランスギク (きく科)

(園芸種のマーガレットと混同し易い)



オオアワダチソウ (きく科)

(セイタカアワダチソウより小型)



セイヨウタンポポ (きく科)

(群生していることが多い)



■ 外来植物対策 Q&A (その1)

☆ 外来植物はすべて除去しなければいけないのですか？

⇒湿原、草原、森林など自然の中に入り込んで、もともとあった植物を追い出してしまふようなものは除去する必要があります。

しかし、現代では人が生活しているところにはとても多くの外来植物が育っています。道端や家の敷地内には見られても、それ以上自然の中に広がっていない植物とは共存することも考える必要があります。

外来植物すべてを除去しなければならないと考えずに、自然の中にどんどん入り込んでゆく植物なのかどうかをまず見極めましょう。



■ 外来植物対策 Q&A (その2)



☆それでは除去は具体的にどうすれば良いのでしょうか？

⇒自然の中に入りこむ危険の大きいものから順に除去を進めるのが効果的です。どの場所をどの外来植物から守るのかをはっきりさせて、そのために必要なところは徹底して除去したいものです。また、除去が不十分だったり、やり方が良くなかったりするとせっかくの努力が無駄になりかねません。他の地域の例も参考にして、効果的な除去方法を試しながら行いましょう。

イベントのような形で一斉に除去するだけでなく、地域をよく見る機会のある人達による日常的な活動・継続的な活動がとても重要です。

■ 外来植物対策 Q&A (その3)

☆奥日光は観光地なので花のきれいな植物はどんどん植えたほうがよいと思うのですが？

⇒国立公園を訪れる人はその土地ならではの自然を見に来るのですから、奥日光にもともとあった植物を大切にすることが大事です。その土地に無かった花を植えることは、きれいな花であっても奥日光の自然を壊すことにつながります。

また、奥日光にもともとあった種類の植物でも他の地域から持ち込んだものは、遺伝子に違いがある可能性があります。もし他から持ってきた花を庭や店先に植える場合は、自然の中に入っていきたくないよう注意しましょう。



コカナダモについて



湯ノ湖で大繁殖し、湯川にも入り込んでいるコカナダモは北アメリカ原産の外来水草で、1963年に琵琶湖で発見されて以来各地に広がっています。ちぎれた体から栄養繁殖で増えるので、やっかいな水草です。

湯ノ湖では1年に数回コカナダモの除去を行っていますが、この除去活動は湖の栄養分を外に出し、水質をきれいにするにも役立っています。